伝統的な薬

古くから伝わる処方

日本の歴史の揺りかごである奈良県では、古くから薬の生産が行われ、また民衆を救済するため、多くの寺院などにおいて、施薬とよばれる薬の施しが行われました。奈良県に縁のある、伝統的な薬について紹介しましょう。

陀羅尼助

この薬の創製は、行者・山伏の元祖ともいわれる、役小角、またの呼び名を役行者と伝えられています。役小角は、茅原の里（現在の御所市茅原）に生まれたといわれており、奈良県にゆかりの深い人物です。

陀羅尼助は、色々な症状に用いられる胃腸薬で、当時はキハダの皮を煎じ、それに大峯山で採れる薬草を混ぜて作っていたようです。下痢止めと整腸の両方の作用を兼ね備えた、優れた薬でしたので、宗教的・神秘的な魅力が相まって、次第に広まりました。

ところで、陀羅尼助には、大峯山と高野山の２つのルーツがあるといわれています。すなわち大峯山においては役小角、高野山においては弘法大師が始祖といわれています。その後、大峯山をルーツとする陀羅尼助は、吉野山や当麻寺においても作られるようになりました。どちらも役行者のゆかりの地です。

当初陀羅尼助は、山伏たちの持薬・施薬として用いられたようですが、近世中期になって、売薬として市場に出回るようになりました。

現在でも、主に天川村洞川と吉野山において製造され、広く親しまれています。

役行者座像（吉祥草寺蔵）

豊心丹

西大寺の叡尊の創製（１２４２年）によると伝えられる薬です。『金瘡秘伝』（１５７８年）によると、その処方は、人参、白檀、沈香、畢撥、樟脳、縮砂、丁字、木香、川芎、桔梗、麝香、無上茶、梹榔子、金箔、藿香となっています。効能は、下痢、渋腹、風気、頭痛、二日酔い、心気の疲れ、吐血、下血、小児の疳の虫、その他万病に効くとうたわれていましたが、現在ではほとんど生産されていません。

豊心丹包紙（「南部名産文集」より）

六神丸

奈良県と特に縁の深い薬というわけではありませんが、現在の配置薬において、特徴的な薬の一つです。

中国ではかなり古い歴史を持つといわれています。六神丸の名称は、中国の六つの神にあやかったものです。その六神とは、方角の神の四神（東の青竜、西の白虎、南の朱雀、北の玄武）に広陳、騰蛇の二神を加えたものです。

六神丸は、その名にちなんで、たいてい６つの生薬からなる気付け薬です。強心作用の強い蟾酥（蛙からとった生薬）を中心に、各種の高貴薬といわれる希少価値の高い生薬（滋養強壮のものを中心として）が配合されています。蟾酥以外は、いくつかのバラエティーがあります。

代表的な処方には、以下のようなものがあります。

蟾酥、麝香、牛黄、熊胆、人参、竜脳

〔(真珠)、(沈香)、(羚羊角）などと代わる場合もあります。〕

麝香や熊胆のように、基原動物がワシントン条約によって保護されることになったものもあり、代用の生薬が用いられる場合もあります。 製剤は非常に小さな粒の丸剤で、多くの場合には金箔でコーティングされています。

蟾酥

奇応丸

小児用の五疳薬（子供が種々の病気で衰弱したり、呼吸が弱くなったり、神経症状が起きたりしたときに服用する薬）です。

樋屋家の奇応丸が有名ですが、これは、奈良県の寺院（東大寺）から発見された処方に基づき再現されたものといわれています。処方としては、六神丸から蟾酥を抜いた構成に似ています。

東大寺の破れ太鼓を修理したところ、その腔裏に薬方が書かれてあり、その方剤を造って試してみると、諸病に数々の奇効と妙応を表したので、奇応丸と名付けたと言われています。また、唐の名僧の鑑真和上が日本にもたらした薬方のなかに奇効丸というのがあり、その処方と似ていることから、太鼓に記載されたこととの関連性を有力視する説もあります。

中将湯

中将湯は、津村重舎（現ツムラの前身・津村順天堂の創業者）の母の実家である藤村家（奈良県榛原）に代々伝わる婦人病の妙薬でした。この薬の由来は、「中将姫伝説」にはじまりますが、天平１９年（７４７年）に藤原豊成家に生まれた中将姫が、当麻寺での修行中に藤村家と親しくなり、薬方を伝えたのが中将湯の原型となっていると言われています。津村順天堂が東京・日本橋に「中将湯本舗津村順天堂」の看板をかかげたのは、明治２年（１８９３年）のことで、婦人良薬として販売された中将湯は、当帰、芍薬、川芎、桂皮など１６種類の薬草からなる処方で、桂枝茯苓丸、四物湯、四君子湯などに準じたものです。

命の母

命の母を世に出した笹岡省三は、幕末に奈良の榛原に生まれ、子供の頃から薬草を探し求め、その研究に余念がなかったと言われています。上京し製薬業に奉公した後も、女性不快症状を取り除く薬を求めて、漢方処方の中から四物湯、当帰湯、当帰芍薬散、当帰四逆湯などを参考にして、なるべく効能範囲が広く、飲みやすい処方を造り上げたとされています。

中将湯と命の母は、女性保健薬の代表的ブランドとして長年親しまれてきていますが、成分として配合される当帰や芍薬は、良質な品質のものが古くから奈良で栽培されてきた経緯があります。